

# 願生寺と木造阿弥陀如来坐像

願生寺は旧茶畑村唯一のお寺で、茶畑浅間神社の東側で隣り合わせにあります。

延宝5年(1677)茶畑村明細帳の最終条に

「時宗遊行派南長(朝)山願称寺、本尊座像之弥陀御長三尺、木仏ニ而春日之御作ニ御座候、此寺開山豆州三嶋西福寺方(より)但阿弥と申沙門参、延文元丙申年開闢仕候、当年迄三百式拾壹年之寺ニ而御座候、開山方当住迄拾九世、本寺相州藤沢清浄光寺ニ而御座候」と書かれています。

願生寺は時宗遊行派、本尊は阿弥陀如来座像である、三島西福寺より僧侶が参られ、321年前の延文元年(1356)に開山、今の住職まで19世、本寺は相州(神奈川県)藤沢の清浄光寺である、と述べています。

平成30年8月、東京国立博物館常設展示場において願生寺所蔵の木造阿弥陀如来坐像が展示、一般公開されました。像は高さ約88cmの割矧造り(※注4)で、底は上げ底状にえぐられています。明細帳には「春日之御作」とあり、技法から見ても鎌倉時代の奈良仏師運慶一門による制作と考えられます。全体的に腐食傷みが激しく東京国立博物館に寄託、修復がされたもので現在も同館で保管されています。なお、本座像は平成14年10月、静岡県指定有形文化財として指定を受けています。

お寺の伝来については以下のような伝説があります。

足利尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻し、建武2年(1335)12月11日、足利尊氏軍と尊良親王(後醍醐天皇第1子)軍が竹之下、足利直義軍と天皇側、新田義貞軍が箱根の地で対峙することになります。尊良親王に付く脇屋義助の軍勢は街道を東に進み、いわゆる竹之下合戦が起きました。その夜、親王軍も足利軍もかがり火を焚き、火は赤々と山々に映えたといいます。開けて12日、竹之下で戦いが始まり、昼頃までは互角に戦っていた親王軍の一部が足利方へ寝返ってしまったため親王軍は総崩れとなって裾野方面へ退却しました。

傷ついた親王軍の兵士たちは刀を杖に疲れた身体をひきずって願生寺の場所にたどりつき救護を受けました。このときの戦死者は手厚く葬られましたが、当時この場所は足利方の支配下にあったため供養塔に文字を刻むこともできず、ただ京の都の方角に向けて堂宇が建てられた、と伝えられています。

茶畑地域は中世佐野郷の重要かつ中心的地域だったこと、開山の時代は内乱の南北朝時代、勢威を有した葛山氏、大森氏が鎌倉時代から北条氏との深い関りが根拠ではと推測されます。

また、願生寺境内には「南無阿弥陀佛 天下和順 日月清明」、茶畑村など22ヶ村名が刻まれた唯念上人号塔(天保14年(1843))が建立されています。

※注4: 一本の木を削り、頭部と体幹部部分を縦に左右・前後に割り離し、さらに丸木船を矧(は)ぐように内側を矧ぎ、割り離し時の割れ目で繋ぎ合わせる技法



# 楽しい郷土史だより 第12号

## 裾野市指定文化財「木造四面女神像」<sup>もくぞうしめんじょしんぞう</sup>「木造隨身像」<sup>もくぞうずいしんぞう</sup>

令和5年2月22日、裾野市の指定文化財として新たに2件の像が指定されました。今回の郷土史だよりは、これらの像と、それを伝える茶畑浅間神社を中心にお伝えします。

### (木造四面女神像)

この像は顔を前後左右の四面に配するめずらしい神像で、頭髮と正面の持物、衣文を墨で書いており、長い頭髮から女神像とわかります。制作年代は平安時代後期(11~12世紀)と考えられます。

平安時代前期(9世紀頃)は、富士山が活発な噴火活動をした時期で延暦19年(800)と延暦21年(802)に発生した噴火「延暦大噴火」、貞観6年(864)から貞観8年(866)にかけて発生した大噴火「貞観大噴火」が記録されています。

噴火は争いや悪病流行の前兆として恐れられていたため、噴火を鎮める願いを込めて浅間神社が祀られてきましたが、富士信仰に関わる古い記録では、浅間大神は女神とされていたことが知られています。

四面に顔を配した女神像の形は、四方八方から見る事が出来る富士山をモチーフにしているとも考えられます。女神像は古代における富士山信仰のかたちや、それに寄せた人々の想いを我々に教えてくれる貴重な神像といえます。

なお、山梨県南アルプス市にある江原浅間神社には、背中合わせに三方を向く女性像(女神)と、その上に半身の仏像(如来)が乗った木造浅間神像が伝わっています。この像は、一本の木材から彫りだした高さ40.5cm、表面に着衣などの彩色を伴うもので、国の重要文化財に指定されています。

### (木造隨身像)

神域や神前を守る二体一對の隨身像で、一体は正面を向き髭をあらわしますが、一体は首を大きく曲げて右を向くのは他に例を見ない姿です。木造四面女神像と同じく平安時代後期の製作と考えられます。

静岡県内には古代の随神像がほとんどなく、風雨にさらされ風化が激しいですが本像は貴重な作例と言えます。

なお、静岡県『静岡県史』第三卷(昭和11年)によれば、茶畑浅間神社には木造四面女神像と同様に四面を表し頭頂に髪を結び、左手を下げ右手をやや上げる像高60cmほどの女神像や、一木造で智拳

印を結ぶ像高47cmほどの大日如来像が伝来していたとされています。現在それらの像の所在は不明となっていますが、本像の指定を契機にその所在が明らかになることも期待されます。

QRコードから木造四面女神像の3Dデータ画像を見る事が出来ます。  
ぐるぐる回転させながらあらゆる方向から像を見ることが出来るので、是非体験してみてください。



上原美術館 田島整氏撮影

【編集・発行】裾野市文化財保護審議会・裾野市教育委員会生涯学習課  
裾野市深良435番地 TEL055-994-0145 令和6年3月発行  
当パンフレットは裾野市公式ウェブサイトでも公開しています





# 茶畑浅間神社

一面でお知らせした貴重な像が伝わる茶畑浅間神社について見ていきましょう。

茶畑浅間神社は茶畑地区の氏神で、裾野駅から東へ700メートルほど、道場山（どうばやま）と呼ばれる丘の上に鎮座しています。江戸時代後期に完成した『駿河志料』（※注1）茶畑村の項には、「富士浅間社」とあり、「鎮座年歴未詳」ながら「近村中の大社」であるとされています。当時から立派な神社だったことが想像されます。（ただし後述のとおり、駿河志料完成の3年前に神社自体が遷座しています。その事実に触れられていないことを考えると、この駿河志料の記述は遷座する前の茶畑浅間神社について書かれているように考えられます。）

46段の石段を登ると正面に拝殿が見えます。拝殿は昭和5年の伊豆大地震を受けて建て直したもので、狛犬は地震からの復興を記念して制作されました。拝殿を回り込むと本殿が現れます。当社の本殿には覆殿（おおいでん）がなく、きれいに彩色された彫刻を見ることができます。また、拝殿の左手からは富士山をきれいに眺めることができ、富士山の神を祀る浅間神社にうってつけの場所と言えます。



茅の輪のある元日の茶畑浅間神社



彫刻がすばらしい本殿は裾野日光とも呼ばれている

茶畑浅間神社の例大祭は10月15日で、子ども神輿や福引が行われています。また、8月25日の合社祭（※注2）では子ども相撲が奉納されます。神社は地区住民の共有地で、子どもたちの遊び場でもあります。かつては夏休み中に拝殿に泊まったこともあったそうです。

## いつからあったの？

茶畑浅間神社を文字として確認できる最古の史料は「天文20年（1551）12月晦日付判物（はんもつ）」（柏木家文書）です。中世に遡るこの史料には、葛山氏元（※注3）が茶畑浅間神社に寄進を行ったことが書かれています。柏木家文書によるとこれ以降も、氏元により寄進・勧進が度々行われていたことが確認されます。なお、今も本茶区に屋敷跡の残る柏木家は、代々茶畑浅間神社の神職を務めていたとされます。

創建の時期ははっきりしません。延宝5年（1677）の茶畑村明細帳（柏木家文書）には、寺社の項目の先頭に「富士浅間」と記載されていますが、「この宮は村の始めから鎮座すると伝えられている」とだけあり、その他の縁起は当時も残っていなかったようです。しかし、上記の史料から茶畑浅間神社が中世には存在したことが確認できます。また、平安時代の像を伝えることから、古代に遡るのも間違いないと考えられます。

しかし、茶畑浅間神社が現在の地である道場山に来たのは、実は幕末の頃です。では、それ以前はどこにあったのでしょうか？

注1：駿府浅間社の神官、新宮高平により文久元年（1861）に完成された駿河国の地誌。

注2：明治期に周辺集落の氏神（山神社・駒形神社など）が合祀され、拝殿の右側に「合祀社」が建てられている。

注3：永正17年（1520）-天正元年（1573）。今川・北条・武田といった強大な戦国大名のはざま、裾野市域を含め駿河郡から富士郡にかけて支配していた。永禄11年（1568）、武田氏への反逆を追及され、最期は諏訪湖に身を投げたとされている。

## 謎の元宮

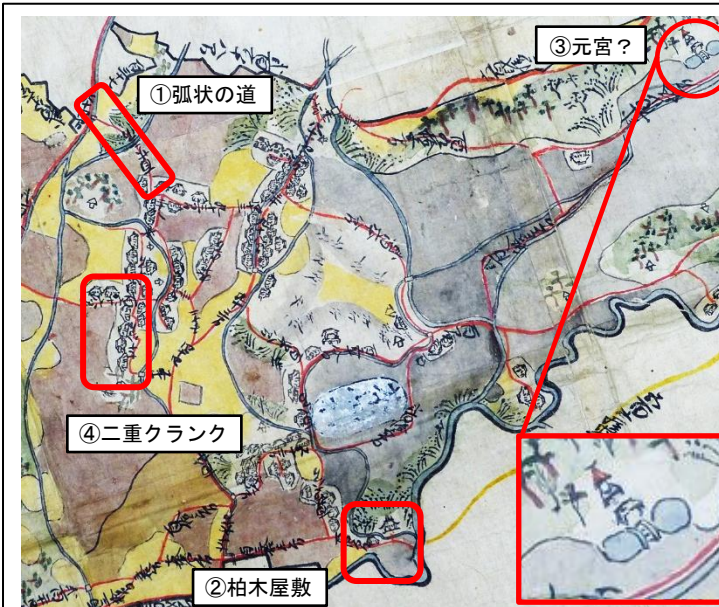
かつての茶畑浅間神社は、茶畑地内の別の場所にあったといわれています。しかし安政5年（1858）の地震に加え、6月23日の暴風により当時の社地が崩壊してしまいます。そのため、同年8月、現在の位置（道場山）に遷座されました。遷座以前の正確な位置を確かめる術はありませんが、いくつかのヒントからその場所を探ってみましょう。

### ヒント① 言い伝えと石灯籠

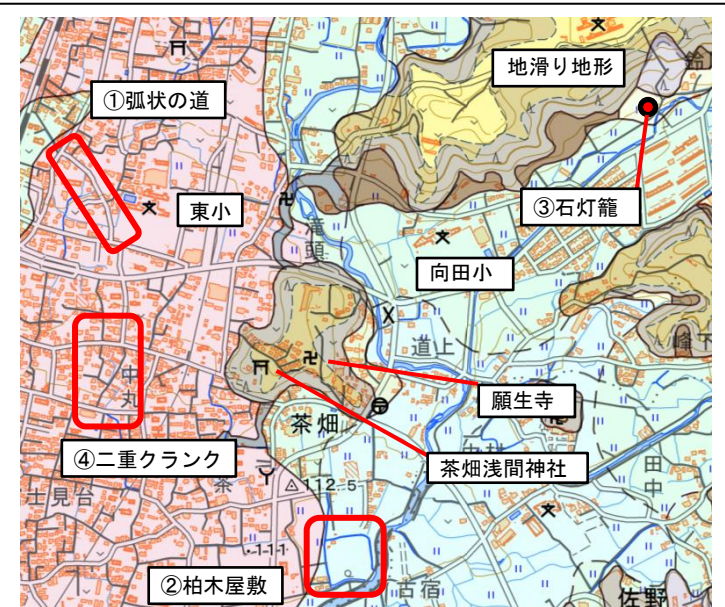
かつての茶畑浅間神社は「モトミヤ」という地、県営住宅の北側にあったと言われています。東中学校へ登る階段の手前には文政元年（1818）に中丸の芹澤氏が奉納した石灯籠（部分）が残されており一つの証拠となりそうです。

### ヒント② 古い絵図と現地形との比較

柏木家には延宝5年（1677）の茶畑村絵図が伝わっています。この絵図は現在の地図と比較しても、東小学校西側にある①弧状の道や②柏木屋敷の位置など、非常に正確に描かれていることが分かります。絵図の右上を見ると、③朱色の屋根の建物と、その手前には池と橋が描かれています。③石灯籠の位置からも、この建物がかつての浅間神社と考えられます。



延宝5年茶畑村絵図（柏木家文書）



国土地理院火山土地条件図「箱根山」を加工して作成

### ヒント③ モトミヤの地形

モトミヤの地は箱根連山の山裾に位置しています。そこで、国土地理院火山土地条件図「箱根山」という地図で同地を確認してみると「地滑り地形」（薄いグレーの部分）となっています。科学的にも同地が過去に山崩れを起こしていたことが分かり、上記の説の裏付けとなります。

## 地域を知ろう

かつての茶畑浅間神社の場所を「間違いなくここだ」と言い切ることはできません。それでもこうした事実を積み重ねると「恐らくここだったのではないか」と言うことはできそうです。

幕末といえば、日本史の教科書では近現代のすぐ手前です。そんな時代の身近な歴史でも思いのほか分からないことが多く、調べてみると面白い発見があります。

今一度絵図を見ると、松井米店東側の④二重クランクもこの時点で描かれていることが分かります。茶畑地区に限らず、現在の街のベースは江戸時代には出来上がっています。足元の歴史に興味を持ち、地域をもっと知ってみましょう。きっと今以上に地域を愛し、誇る気持ちが芽生えるはずです。皆さんの学びを文化財保護審議会・生涯学習課がお手伝いいたします。ぜひお声がけください。